

# 41 進行子宮頸癌に対するTAE併用CDDP術前動注化学療法での組織内Pt濃度の検討

市立岸和田市民病院 白井孝昭、竹村真紀、立山一郎

【目的】進行子宮頸癌に対しTAE併用CDDP動注化学療法を長年にわたりNeoadjuvant chemotherapyとして施行してきたが、極めて良好な5年生存率を得ている。今回動注後の摘出標本で種々の部位の組織内Pt濃度を解析し、それと病理組織学的効果の関係について検討した。(方法)臨床進行期でⅡ期 7例、Ⅲ期 6例、Ⅳ期 8例を対象とした。動注1回の薬剤使用量はCDDP100～150mg、epi-ADR 40mgであった。Seldinger法にて腫瘍栄養血管(主に子宮動脈)を選択し薬剤を約10分間かけて注入後TAEを併用した。同方法を3週間毎に3～4クール施行し3週間後に拡大子宮全摘術を行った。摘出子宮で病理組織学的効果を検討すると共に、子宮頸部の組織で原子吸光法を用いてPt濃度測定を行った。また同時に体部内膜及び体部筋層におけるPt濃度も測定した。(成績)病理組織学的効果判定基準に従えば、進行期Ⅱ期(gradeⅢ 7例)、Ⅲ期(gradeⅡ 1例、gradeⅢ 5例)、Ⅳ期(gradeⅡ 8例)であり、gradeⅡ以上の効果を得た。Pt濃度は頸部のgradeⅢ、Ⅱ群で平均11.7、6.2  $\mu$ g/g wetであり、gradeⅢ群で高値の傾向を認めた。体部内膜、体部筋層のPt濃度はgradeⅡ、Ⅲ群で平均7.4、7.1  $\mu$ g/g wetであった。(結論)進行子宮頸癌に対するCDDP術前動注化学療法で組織学的にgradeⅡ以上の効果を得るためには、詳細な腫瘍栄養血管の同定と、CDDPを腫瘍組織内に停滞させる為のTAE併用が重要と考えられる。そして病理組織学的効果gradeⅢを得る為には、頸部組織内のPt濃度を10  $\mu$ g/g wet以上に上昇させるまで動注、TAEを繰り返すことである。逆に頸部Pt濃度が10  $\mu$ g/g wet近くに上昇すれば、その時点で子宮頸癌は組織学的に完全消失に近い状態になっていると考えられる。

# 42 進行子宮頸癌に対するNeoadjuvant chemotherapyとしての動注化学療法の有用性について

神戸市立中央市民病院 産婦人科  
塩谷雅英、谷和 光、大川恵子、服部奈緒、中村公彦、小松孝之、星野達二、島田逸人、池内正憲、伊原由幸

【目的】当科では進行子宮頸癌症例の予後向上とQOLの改善を図り、主治療を開始する前に動注化学療法を実施し良好な成績を得ている。その治療成績を2期と3期の進行子宮頸癌症例について検討した。【方法】当院でNeoadjuvant chemotherapyとして動注療法を実施した子宮頸癌44例を対象とした。年齢は33才から78才、進行期はⅡ期26例、Ⅲ期18例であった。組織型は扁平上皮癌33例、腺癌10例、腺扁平上皮癌1例であった。動注療法はSeldinger法を用い、CDDP 50～70mg/m<sup>2</sup>、epi-ADR 40mg/body、MMC10mg/bodyを基本量として1～4コース実施した。主治療として33例には手術を実施し、10例には放射線治療を実施した。【成績】動注治療後18例にCR、15例にPRを得、奏功率は75.0%であった。組織型別に検討すると奏功率は扁平上皮癌79%、腺癌・腺扁平上皮癌では64%であった。Neoadjuvant chemotherapy後に手術を実施した33例中11例(扁平上皮癌9例、腺癌・混合型癌2例)には組織学的CRが得られた。骨盤リンパ節郭清を実施した30例中リンパ節転移を認めたのは1例のみであった。現在まで35例は健存で再発兆候はなく、8例が再発し、7例が原癌死している。再発部位は傍大動脈リンパ節4例、癌性腹膜炎2例、肺転移1例、膣断端部1例であった。生存曲線を検討したところ、3期では動注群の予後は非動注群よりも良好であったが2期においては差はなかった。【結論】進行子宮頸癌に対するNeoadjuvant chemotherapyとしての動注化学療法は原発巣および骨盤リンパ節転移に対して高い効果を有することが示唆された。その結果3期症例では長期予後の改善が示された。しかし、2期症例においては長期予後の改善は得られず、骨盤外再発を押さえるような併用療法が必要と考えられた。